

組織目標評価報告書（平成25年度）

部局名: **理学部**

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域	自己評価
①-1 目標	1 教員の最先端研究に基づく学部教育の改善 平成23年度に採択された文部科学省理数学生育成事業により、フロンティアサイエンティスト特別コースを開設しているが、同コースに先端科学実習を開講、所属教員の最先端研究に基づく実習を実施し、あわせて専門教育のカリキュラム開発研究をおこなった。ハワイ実習を実施し、国外の先端研究施設の見学や、野外実習を実現させた。コース生がサイエンスインカレにおいて発表した。化学科は、国立台湾大学理学院と国際ワークショップを実施し、学部学生による相互交流ならびに英語によるコミュニケーションの高度化をはかった。附属臨海実験所は全国教育関係共同利用拠点に認定されており、先端的研究設備を導入し、学生実習の高度化をおこなった。
1 教員の最先端研究に基づく学部教育の改善に努める。	2 入試制度の再検討及び入学試験に関する広報活動による優秀な学生の確保 平成25年度入試より入試選抜方式を変更し、前期日程と後期日程、および物理学科におけるAO入試(物理チャレンジ)を実施した。志願倍率は前期日程では2.8倍で、目標をこえる志願者があつたが、後期日程では8.3倍であり、良好な結果が得られた。学部独自の学部公開行事や先端研究の公開講演会を実施するなど広報活動を積極的に行い、優秀な志願者の確保に努めた。また、私費留学生の入学希望者についても一定数を維持している。今後は、入試方式の一層の広報活動を進めるとともに、志願並びに入学状況を解析し、配点や募集人員等の検討を行う必要がある。
2 入試制度について、再検討を行うとともに、入学試験に関する広報活動を積極的に行い、優秀な学生の確保に努める。	3 自主学習室、ゼミ室等の学習環境の点検を行い、学生に対する学習環境などの充実を図る。
3 自主学習室、ゼミ室等の学習環境の点検を行い、学生に対する学習環境などの充実を図る。	4 省エネ対策に努める。
4 省エネ対策に努める。	5 卒業時における学生の質保証のためのカリキュラムその他について検討を開始する。
5 卒業時における学生の質保証のためのカリキュラムその他について検討を開始する。	
①-2 目標とする(重要視する)客観的指標	
・ 前期日程の志願倍率2.5倍を確保する。	
②研究領域	自己評価
②-1 目標	1 戦略的重点プロジェクト研究及び新分野の創成を目指す基礎研究の推進 理学部教員が主に参画する全学や大学院における拠点・センターにおいて、人事や運営に協力し、研究費についても一部支援をした。また、それらの戦略的重点プロジェクトの連携を図りながら、予算獲得を目指す取り組みを試みた。一方、若手を主体として、研究の質に責任を持つような制度のもと、研究経費の援助を実施して、新分野の創成を目指す研究を推進した。さらに、長期的な展望のもとでの研究を支えるため、科研費不採択課題についてA評価であった研究提案全てについて、研究費の一部援助を実施し、各分野における重要な研究の継続を図った。
1 戦略的重点プロジェクト研究及び新分野の創成を目指す基礎研究を推進する。	2 世界的に高評価されている研究の継続的な発展を図る。
2 現在世界的に高評価されている研究の継続的な発展を図る。	2 世界的に高評価の研究の継続的発展 理学部教員グループによる光合成研究は、世界をリードする先端的研究成果を上げて国内外での評価はきわめて高い。その成果を基に大学院に理学部が中心となり「光合成研究センター」を設立し、国際共同研究を含めた関連分野との連携研究の一層の推進をはかった。また、本学の研究プロジェクト「原子を利用したニュートリノ質量分光プロジェクト」および「異分野融合型研究展開による先端環境エネルギーデバイス・材料開発」は、理学部教員が中心となるプロジェクトであり、文部科学省からの特別経費(プロジェクト分)を配分されている。これらに関しても、研究グループを充実して研究成果を上げるとともに、国際会議を主催して成果の国際的な発信に努めた。また上記研究は、Research Univ.採択に関するグローバル最先端異分野融合研究教育機構での主たる研究3分野を担っている。これら研究に関連して、理学部の教員が大きく関与する研究が、本年度にNature誌に2報掲載されている。また、大規模な学会における学会賞等(日本動物学会学会賞、日本数学会代数学賞)を受賞している。科研費申請については、退職者などの特殊事情を除いて、件数として目標を達成している。
②-2 目標とする(重要視する)客観的指標	
・ 科研費申請において継続分を持っていない教員全員が新規申請を行うことを目指す。	
③社会貢献(診療を含む)領域	自己評価
③-1 目標	1 公開講座・出前授業・研究室公開を例年通り実施し、学部の教育・研究内容の公開を行い、目標を達成している。また、従来通り高大連携事業として高校からの学部訪問を受け入れた。さらに、高校のスパサイエンスハイスクール(SSH)事業に協力した。教育共同利用拠点である附属臨海実験所は、西日本を中心とした全国の大学の共同利用拠点となり、初等中等教育や地域の教育活動の充実化、高度化に大きく貢献をした。理学部教員が主催する学会において、下村脩博士を招いて市民を対象とした講演会を企画し、多数の参加者を得て、地域社会の啓発に貢献した。
1 公開講座・出前授業・研究室公開を通じて、学部の教育・研究内容を公開し、地域社会に貢献する。	
③-2 目標とする(重要視する)客観的指標	
・ 高大連携事業等を年30件以上実施する。	
【総括記述欄】	
教育領域においては、優れた達成状況にある。理数学生育成事業に基づくフロンティアサイエンティスト特別コースは、本年度も海外実習を実施した。事業は26年度で終了するために、同コースの将来について検討する時期となっている。教育共同利用拠点の附属臨海実験所の業務は、順調に進んでいる。従来の業務に追加して、新規事業を開始しているため、共同利用施設の改修などが必要である。学生のキャリア育成教育の充実とメンタルヘルスの取り組みを開始しているが、いまだ不十分であり今後の重要課題である。研究領域においては、良好な達成状況である。特に、光合成研究の研究成果が極めて高い評価を受け、一層の研究展開の契機となるとともに、理学部における基礎研究の重要性を社会に広く知らしめる機会となった。この研究を含めた、Research Univ.採択に関するグローバル最先端異分野融合研究教育機構での主たる研究分野は理学関係であり、これらの研究を加速的に推進することが求められている。その他の重点研究プロジェクトにも多数の理学部教員が携わり、順調と考えられる。他方、理学部内の研究スペースの狭隘化が深刻になってきているので、研究環境の改善が必須の課題である。社会貢献の領域では、高大連携を中心に良好な達成状況にある。	